

4月27日のと地震被災地視察報告

社会委員会 橋本裕明

今回の視察は「のとサポートミーティング」の参加活動団体向けの1日ツアーで、目的は被災地の現場を確認し、以後の支援の具体的計画を策定に役立てるというものでした。参加者 10 名(片岡義博師を含めて)は午前 7 時に金沢教会に集合し、カリタスジャパン

の車二台に分乗して、県道 60 号から「のと里山海道」へ入り、約 120 キロを一路輪島市に向かいました。まず内灘町に踏み入れたところで地面の隆起、それに伴う家屋の倒壊、道路の破損が見られました。その後県道 60 号線は車はスムーズに流れていましたが、「の

と里山海道」(県道 1 号七尾輪島線)に入ってから、風景は一変し、山崩れが諸所に見られ、崖崩壊によって2車線は片側(輪島方面から金沢方面)が使用できず、1車線の一方通行道路に工事され、しかも随所に波打つ路面を注意しながら走行しました。地震前であれば金沢市から約2時間で着きますが、2時間半以上かかって輪島市に入りました。

輪島市ではまず中心部で車を降りて、歩き回りましたが、崩壊家屋が非常に多く、そうでなくとも建物には「危険」「要注意」の張り紙が貼られていました。重蔵神社での物資支援状況を確認しました(この神社でも大きな被害を確認)。米、飲料水、レトルト食品、衣類など、生活全般に必要なものをボランティアの方々が配布し、コーヒーのサービスもしていました。ペットボトルは一人3本までと決まっており、神言会の神父さんが配布しているのを少し手伝いました。多くの人は車で物資を取りに来ますが、問題は車を持たない人たちで、これにはボランティアによる自宅及び仮設住宅への配布が必要となります。飲料水と食料品の確保と配布、もちろん同時に被災された方々への生活上の支援(金銭、住宅など)さらに、メンタル上のケアが不可欠であると実感しました。七尾市のボランティアセンターの活動に加わりながらも、カトリック教会の独自の支援を検討する必要があります。

日本三大朝市の一つとされる輪島の朝市の区域は、震度7の揺れと火災でほぼ全焼、まるでウクライナやガザを思わせる焼け跡でした。震災後もう四ヶ月がたちますが、ほとんど手付かずで放置されたままです。個人の支度金では取り壊しも修繕もできず、公費による処理を待っている状態のようです。申請してもいつ工事に入ってもらえるかわからない状態です。何とか崩壊を免れた建物の多くもいつ倒れるか微妙です。これはしかし国や自治体の援助を優先するしか方法がないと思われれます。瓦礫や家具の撤去、仮集積場への運搬はボランティアで援助できるかもしれませんが。焼け跡ではご家族、ご親戚を亡くされた方々でしょうか、献花し手を合わせておられたのが印象的でした。

輪島教会は美しい聖堂ですが、祭壇上の大理石版が転がり落ちていました。外壁もひどい破損状態で、建て直しが必要と思われます。また駐車場も地面の崖が崩れているので、手を入れる必要があると思います。その後、輪島市の海岸で昼食をとりましたが、眼下には地震で海底が隆起して作り出した白い岩肌が異様な姿を見せていました。輪島からは和倉温泉に向かい、いくつかの旅館の被害を確認しました。

七尾市ではボランティアセンターを訪れ、フランシスコ会の元田師からボランティア活動の現状についての情報をもらいました。そしてその後、男女ボランティアの宿泊所に予定されている七尾教会(司祭館:女性、マリア館:男性) 団体ボランティア(高校生や中学生など)を受け入れる羽咋教会を訪問し、午後6時に金沢駅に到着しました。

【所見】

- ① 行政の仕事と教会の支援を分け、ボランティア関連に関しては具体的な長期計画を策定する必要があるが、当面は現場を把握している片岡師の判断を優先し、その依頼に即時対応する体制をとる。飲料水、食料品、生活用品の補助が第一であるが、今後は仮設住宅への訪問や、被災者のメンタル・ケアも教会の役割として考えるべきだと思われる。
- ② 現在の支援体制はどうしても脆弱である(片岡師を中心とした若干名のボランティアで回っており、負担が大きすぎる)。そのために早急な組織化が求められると判断する。ボランティア対応(受け入れ業務) 支援の企画立案と具体的な活動の指示
(物資配布や寄付金の管理など) 七尾・羽咋ベースの運営など、常住者による責任体制が必要であろう。片岡師はそれを監督する立場で、身を軽くして自由に活動されるべきであろう(心身面の疲労が心配)
- ③ 名古屋教区の社会委員会(小教区の選出者による構成)が片岡師の能登サポートセンターと密接な連携をとり、長期的に後方支援をする体制づくりが求められると思う。社会委員会は議論検討の上、各小教区に対して直接支援を依頼する形にしてはどうかと思う。

以上